

皇弟・溥傑の思い、いまこそ形に！

インタビュー vol.10

五光株式会社 二木 崇さん（新大阪支部）

ラストエンペラーの実弟・溥傑（ふけつ）の書体をもとにしたフォントをこのほど発売する二木崇さん（五光株式会社）をインタビュー。このプロジェクトにかける思いをお聞きました。



溥傑の書「開卷有益」と二木さん

■日中貿易のパイオニア

同社のルーツは江戸時代、加賀藩の回船問屋だった「二木屋」にさかのぼります。二木さんはその9代目。“海の総合商社”といわれる北前船は、当時からすでに複式簿記やマーケティングの考え方を実践し、財を蓄えました。いまの社訓も「北前船の進取の精神を現在に」です。

しかし大正時代に入ると汽船の普及、鉄道網の整備とともに没落。8代目だった二木さんの父・三雄氏は活躍の場を中国大陆に求めます。「ゆけ満州へ！」と日本人が大陸を目指した時代。大手商社と組んで自転車の部品などを輸出しました。

1945年、敗戦で引き上げ。無一文になりゼロからの再スタート。1949年、中華人民共和国の成立と同時に三雄氏は貿易商社「五光」を創業。日中の国交がなかったこの時代に両国貿易を支えた友好商社のパイオニアとなりました。1950年には周恩来首相との折衝でオート三輪などの輸出契約を取り付けます。ちなみに社名は「五大陸に栄光を」という意味です。

ところが1972年の国交正常化により大手商社が日中貿易に直接参入。「五光」の友好商社としての歴史的使命は終わり、その後は自動車部品や機械関連の商社として歴史をつなぎます。

■ラストエンペラー実弟・溥傑との親交

二木屋・五光のヒストリーには歴史的人物が何人が登場します。ラストエンペラー・愛新覚羅溥儀の実弟・溥傑もその一人。「満州国」皇弟だった溥傑は日本の公爵家出身の嵯峨浩と結婚しています。二人ともが教養人で溥傑は書、浩は絵画に造詣が深く、互いに尊敬しあっていました。政略結婚だったとはいえ二人の存在はいまや日中友好のシンボルともなっています。

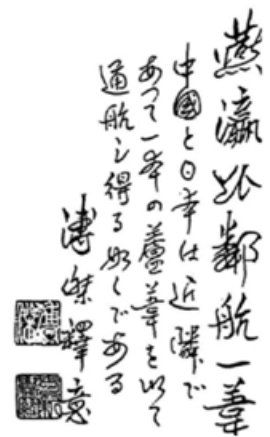
三雄氏は溥傑と親交が深く、五光創業翌年の1950年から毎年特別なルートで訪中。溥傑が特赦され「撫順戦犯管理所」

から出た後も支援活動に関わりました。二人の親交は溥傑が1994年に死去するまで続きます。

■フォント「相依為命」誕生へ

その三雄氏も2014年に死去。日中友好という父の遺志を受け継いだ二木さんは、溥傑の毛筆書体をフォント化する構想に参画します。書家としても著名だった溥傑。その流れるように美しい書体は現代中国でも人気が高い。日本人書家・香蘭さんの協力を得て、溥傑が残した300文字程度の漢字をもとに、ひらがな・カタカナ・約3000字の漢字などを再現。それをシステム会社「スキルインフォメーションズ社」の技術を使いフォント化に成功。日本語版がこの6月に発売予定です。将来は中華圏を対象にした中国語版も視野に入れていきます。

フォントの名前である「相依為命（そういいめい）」とは溥傑が大切にしていた言葉。「政治・国家がどのような変遷を遂げようと、人と人、家族、夫婦、親子、隣人同士、互いの幸福を願う気持ちがあれば生きていける」という意味です。「溥傑さんの書は『流れて流されず』という見事なもの。『反日』『嫌中』を叫ぶネット右翼は日中両国に存在し、お互いが仮想敵国のような愚かしい風潮があります。日中友好を終生願った溥傑さんの思いをいまこそ形にし、次世代につなげたい」と二木さんの思いは熱いものでした。



溥傑の書「燕（中国）と瀛（日本）は葦舟で行き来できるほどの近隣である」

取材：日中経済交流研究会・広報委員会
まとめ：坂元 正三（坂元鋼材株式会社）